真 を　める者、ウマル（3/3）：信仰者の

：

明:ウマルは正 、 大な心、そして敬虔さの模 でした。

目: 事 言者ムハンマド彼の教友たちの物

より: ア イシャ ステイシ

日04 Mar 2013

集日 04 Mar 2013

ウマル ブン アル＝ハッタ ブは、ムスリムのウンマ（国家）における第2代目の正 カリフで、信仰者の と呼ばれた最初の指 者でした。 言者ムハンマドの逝去 、彼に最も近かった盟友であるアブ　バクルが彼の を ぎ、2年 に渡ってムスリムたちを率いました。アブ　バクルが自らの死期が迫っていることを悟ると、彼に近い友人や 近たちを集め、彼らの任 が ったことを告げました。アブ　バクルは自らの　者を彼ら自身で 出することを望んだのです。しかし、　の 、彼に疑いの念を全く抱かないアブ　バクルの教友たちは、彼が　してくれるよう みました。アブ　バクルはウマルを　しました。

アブ　バクルの周りには、非常に辛辣で屈 な男として知られたウマルが人々に しくするのでは、という 念が一部でありました。アブ　バクルは、彼にとってウマルこそが人々の中でも最 の人物であるという返答をしました。当初、マディ ナの人々によるこうした反 もありましたが、ウマルは第2代目のカリフとして任命されました。彼は、自分の

持つ展望を人々へと直ちに演 し、その 治を 始しました。ウマルは、人々が彼の 固な部分について心配していることを知っており、そのことについても りました。

彼はこう述べています。「人々よ、私はあなたがたの 事において 治するよう任命されたことを知りなさい。私の 固な部分については弱まったことを 知して欲しい。だが、抑 的、また逸脱した者たちについては、これからも 固かつ しくあり け、それら者たちの を地べたに押し付けてやろう
。また、私は自分の を地べたに押し付けてでも、敬虔な者を守りぬいてみせよう。」

それからウマルは人々に し、彼は神が命じたもの以外には して彼らの 作物や 利品などから せず、その 入は神をご 悦させるため以外には消 しないことを 明しました。ウマルは 政面における公正さの重要性はもちろんのこと、ムスリムのウンマに属するいかなる小さな 位の通 であれ、その 法や使い道についてはやがて神によって されることを熟知していました。また、ウマルは人々への支 や 入を 加させ、国境を防 することも告げ知らせました。

言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）とその教友たちが、必死に き上げた若きムスリム国家は、独 性に溢れていました。ムスリムの国 からは、ウンマのすべての住民にしての配当が支 われていました。急速に を けていた国家における政府の 事者であるかどうかに わらず、その富は等しく配分されていたのです。それを制度化したのはウマルではなく、彼はただ先人の き上げた 例に っていたのですが、 入の 加を 束したのは彼自身の提案によるものでした。

またウマルはムスリムの を「破 」へとは派遣しないことを 束しました。つまりリスクが 定され、 容可能なものでない限りはそうしないということです。彼は兵士が 期 に渡って家族と れ れにならないこと、そしてもしも らぬ人となってもカリフは彼らの家族の面倒を るということを 束したのです。ウマルは、指 者の役割とは人々の保 であると信じていました。

大 や首相らがボティ ガ ドに まれ、自らの 威を守るためには他人を踏みにじることをもわないような 代においては、こうした概念は非常に奇 に映るものです。ウマル ブン ア

ル＝ハッタ ブは、一大帝国の指 者であったにも わらず、ボティ ガ ドをつけることの必要性を感じることはありませんでした。彼はたとえ夜 であっても、一般市民のようにマディ ナの街路を いていました。事 、彼は夜になると密かに 回りをしつつ、喜 を配布していたのです。

ウマルによる 治期には、「灰の年」と呼ばれた 期があります。この年、ムスリムのウンマにとっての大きな がもたらされました。当 、干魃と が い、 が皮 にあたると、それはまるで燃え が皮 を くほどに いものでした。食肉、バタ 、乳は手に入らなくなり、人々は乾燥したパンの切れ端に油を って えをしのぎました。ウマルは、人々に供 されていないものは して み食いしないと誓いました。食品が市 に供 されるようになってからも、ウマルは 上げされたそれらのものを うことを拒否しました。彼がこう言ったのが耳にされています。「もし私が臣民たちと同じ を受けているのでなければ、どうして臣民たちのことを心配し、理解することができようか。」

ウマルは、その 治から1400年以上たった今でも、正 の人として されて けています。イスラ ムの正 、慈悲、思いやりといった原理に基づき、 富の差、皮 の色、 力の有 に わらず、ウマルは 治する人々をみな平等に いました。彼は神によってやがて彼の行 が されることを常に怖れていました。彼は人々の中に、きちんと世 がされていない病人や困者がいないかどうか を揉んでいました。ウマル ブン アル＝ハッタ ブは、裁判官や 督のを欲していた者たちを任命したのではなく、ウンマの中の最も敬虔な者たちを注意深く んで任命したのです。

ウマルは自らを一般のムスリムとして していましたが、 史による はそれとは程 いものです。ウマルは精神面 肉体面の双方で力 く、 切 高 で、慎み深い生活を みました。ウマルは彼の敬 する 言者ムハンマドの志を受け ぎ、彼の模 に い、彼の を遵守させました。神の を怖れ、 を求めていたウマルは、その全存在をかけて、神のご 悦を得ることに身を注いだのです。ウマルは真 を めることができ、ウンマの中の かが感じる痛みを自らも感じ取ることができ、 かが神の崇 に 足すれば、自らも喜びを感じたのです。ウマルは正 4代カリフの一人でした。 在においても、彼は さ、正 感、 情、慈悲における模 であり けているのです。

Footnotes:

1

これは当 のアラブ人たちが使用していた 用句で、 しい を示す言 として使われていました。それは、他者への抑 と
は完全に められないことを意味しました。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2135

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。